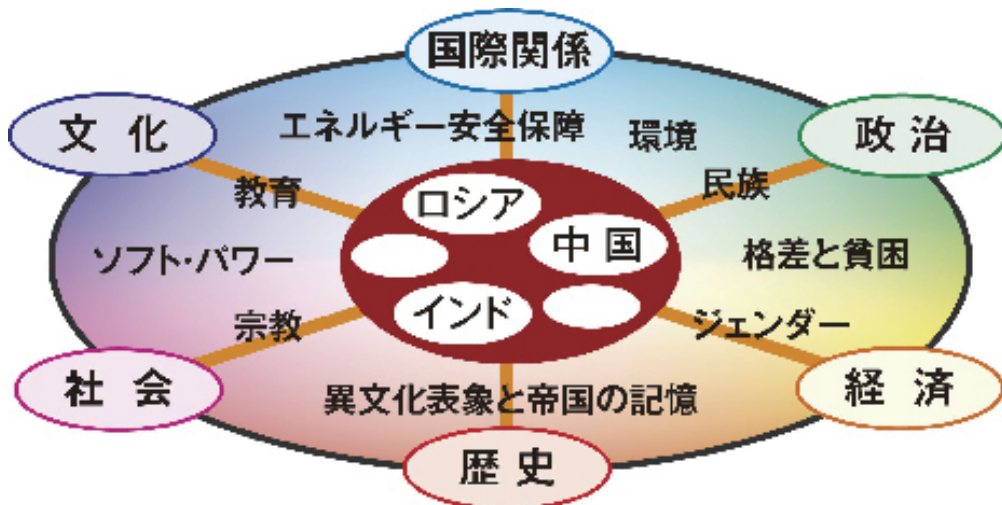


SLAVIC RESEARCH CENTER NEWS No.116 January 2009

研究の最前線

新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」の採択

今年度開始で申請していた新学術領域研究「ユーラシア地域大国の比較研究」（領域代表者 田畑伸一郎）が採択されました。新学術領域研究は、従来の特定領域研究などを再編したもので、今年度から新たに設けられた科学研究費補助金の研究種目です。人文・社会系で今年度採択されたのは、本研究の1件だけでした。研究期間は、2012年度までの5年間です。2008年度の直接経費の総額は4760万円で、5年間では、直接経費だけで5億円ほどとなります。



本研究は、ロシア、中国、インドなど、ユーラシアの地域大国を総合的、学際的に比較しようという取り組みです。ここで、地域大国とは、ある程度の経済力・軍事力を有し、近隣諸国への影響力を発揮しながら、同時に、米国、EU、日本など、政治、経済、文化などの面で現代世界の中核となっている国々に対して、一定の距離を置く大国群を意味します。ユーラシア地域大国は、米国やEU主導の国際政治・経済秩序に対して、時として異議を唱える存在となっています。民主主義や市場経済などについても、先進国とは異なる見方を示すこ

とがあります。また、これらの地域大国は、過去に帝国として存在したことがあるという共通性を有しており、現在においても、かつての文明圏、文化圏を何らかの形で引き継いでいると言えます。

本研究の目的は、第1に、これらの地域大国を総合的に比較することにより、それぞれの地域大国の理解をさらに深めることにあります。日本では、ロシア（スラブ・ユーラシア）、中国、インド（南アジア）のそれぞれについて、十数年前に特定領域研究（重点領域研究）がおこなわれ、それぞれの地域の研究については既に国際的に研究をリードする水準にあります。今回は、初めてこれらの国々を対象とする地域研究者が糾合して研究をおこなうことになりました。これは日本だけでなく、世界的にも画期的なことです。

本研究では、以下のように、国際関係、政治、経済、歴史、社会、文化の6つの視点からの計画研究が設けられています。そして、それぞれの計画研究班に、ロシア、中国、インドなどについての研究者が含まれています。このようにして、人文・社会科学の諸分野にわたる体系的な共同研究体制が作られています。

第1班：国際秩序の再編（研究代表者 岩下明裕、センター）

第2班：エリート、ガバナンス、政治社会的亀裂、価値（研究代表者 唐亮、法政大学法学部）

第3班：持続的経済発展の可能性（研究代表者 上垣彰、西南学院大学経済学部）

第4班：帝国の崩壊・再編と世界システム（研究代表者 宇山智彦、センター）

第5班：国家の輪郭と越境（研究代表者 山根聡、大阪大学世界言語研究センター）

第6班：地域大国の文化的求心力と遠心力（研究代表者 望月哲男、センター）

各計画研究における研究は、対象として取り上げる諸国が地域大国として発展・定着できる条件が何であるのか、また、それを妨げるような不安定要因は何であるのかについて明らかにするという共通の問題意識をもって進められます。ロシア、中国、インドが10年後、20年後にどのような国になっているのかについては、日本でも世界でも大きな関心が持たれていますから、本研究によりそれを学術的に明快に示すことが期待されます。

本研究の第2の目的は、超大国とその他の国々の間に、地域大国という「中間項」を挿入することによって、世界を理解するうえでの新たな視座を確立し、その視座から現代世界の様々な問題について検討することにあります。これは、「超大国の一極支配」あるいは「世界的な均質化や画一化」とは異なる視座です。折から、米国主導の国際秩序は、政治的にも、経済的にも、不安定な様相を強めています。ユーラシアあるいは世界において、ロシア、中国、インドがどのような位置を占めるようになり、どのような世界秩序が今後形成されるのか、そのような問題に答えることが本研究の課題の1つです。図に示したように、本研究では、民族紛争、宗教対立、格差と貧困など、現代世界の重要な問題について、この新しい視座から総合的、学際的な解明を試みることを予定しています。さらに、こうした問題について何らかの政策提言をすることも視野に入れていきます。

本研究についての詳しい説明と研究組織、構成員については、本研究のウェブサイト (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp>) をご覧下さい。

なお、本研究の第1回の全体集会在3月4日（水）午後2時半から北海道大学百年記念会館大会議室で開催されます。プログラムは、以下のとおりです。一般公開の研究会ですので、ふるってご参加ください。

第1回全体集会プログラム

パート1 (14:30 ~ 15:15) 「研究の第1段階にあつて：ねらい・手法・抱負」

報告者：領域代表者と6つの計画研究班の代表者

司会：長縄宣博（北海道大学）

パート2 (15:20 ~ 18:15) 『『ユーラシア地域大国の比較研究』に期待すること』

報告者：猪口孝（中央大学）、長崎暢子（龍谷大学）、沼野充義（東京大学）

コーディネーター：林忠行（北海道大学）

懇親会（18:30 ~ 20:30）場所：百年記念会館きやら亭

また、本研究の第1回の国際シンポジウムが7月9～10日に新装されたスラブ研究センターの大会議室で開催されます。これは、本研究の第3班（経済班）を中心に組織されるもので、持続的経済発展がテーマとなります。これも一般公開ですので、皆さんの参加を歓迎します。
[田畑]

◆ 2008年度冬期国際シンポジウム ◆ 「環黒海地域の跨境政治」のプログラム

2008年度の第2回国際シンポジウムは、北海道大学の重点配分経費の援助を受けて、3月5～6日、北海道大学創成科学共同研究機構（北キャンパス）においておこなわれます。「環黒海地域の跨境政治」をテーマとします。現時点で確定されているプログラムは以下の通りです。[松里]

International Symposium “Trans-border Politics in the Black Sea Rim”

MARCH 5 Thursday

Opening Speeches 9:30 a.m. – 9:45 a.m.

Akihiro Iwashita, Director, SRC; Kimitaka Matsuzato, SRC

Session 1. 9:45 – 11:45 a.m. Learning from History: Macro-regional Tradition of Analyses

Testuya Sahara, Meiji U; Middle East Technical U - Ankara

Akitsu Mayuzumi, Tokyo U “The Black Sea Region as a Crossroad of Three Worlds: From Historical Perspective”

Mikhail Shkarovskiy, SRC “The Soviet Church Policy in Black Sea Countries in 1944-1953” (in Russian)

Disc.: Jun Akiba, Chiba U

Session 2. 1:15 – 3:15 p.m. EU Expansion and the Black Sea Rim

Shigeo Mutsushika, Shizuoka U “The Effects and Limits of the European Neighborhood Policy to the GUAM”

Anatoliy Kruglashov, Chernivtsi National U “Troublesome Neighborhood: Romania and Ukraine Disputes over Territories and Minorities Resolution in Regional and European Perspectives”

Valentin Yakushik, Kyivo-Mohyla Academy U “The Impact of the South Ossetian Conflict on Ukrainian Politics”

Disc.: Taro Tsukimura, Doshisha U

Session 3. 3:30 – 5:30 p.m. Macro-regional Religious Process

Mehmet Gormez, Diyanet, Turkey

Oktay F. Tanriserver, Middle East Technical U, Ankara “Rivalry between the Russian and Constantinople Orthodox Churches in the Black Sea Rims”

Dan Dungaciu, Bucharest U “Conflicts between the Russian and Romanian Orthodox Churches over Moldova”

Disc.: TBA

RECEPTION Aspen Hotel 6:00 – 7:30 p.m.

MARCH 6 Friday

Session 4. 10:00 – 12:00 a.m. Turkish Factors in the Black Sea Rims

Mustafa Aydin, Tobb U, Ankara

Fumiko Sawae, Tohoku U “The Pro- or Post-Islamic Government and Turkey’s Growing Presence in International Affairs”

Ozan Arslan & Itir Bagdadi, Izmir U of Economics “War and Borderland Nationalism in the Transcaucasus: The Historical Shaping of Azerbaijan's Turkic National Identity

Disc.: Yasushi Hazama, Institute of Developing Economics - JETRO

LUNCHEON 12: 15 a.m. – 1: 00 p.m.

Speaker: William Hill, Professor at the National War College (Washington), the former OSCE Mission to Moldova

Session 5. 1:15 – 3:15 p.m. Un-frozen Conflicts in Broader Perspectives

Rebecca A. Chamberlain, LSE “The Marriage of Secession?: Elections, Public Opinion, and Moldovan-Transnistrian Conflict Resolution”

Keiji Sato, SRC “Ethnic Minority Issues at the Border Regions: EU Enlargement and the Ethnic Minorities in CIS Countries”

Disc.: William Hill, National War College

Session 6. 3:30 – 5:30 p.m. The South Ossetian Conflict and the Black Sea Rim

Sergei Markedonov, The Institute of Political and Military Analysis, Moscow “Defrosting Conflicts: Eurasian Security after the War in South Ossetia”

Gia Jorjoliani, Tbilisi U “War and Democracy: Challenges for Georgia’s New Statehood”

Kosta Dzugaev, South Ossetian U “Республика Южная Осетия в ряду признанных государств”

Disc.: Tomohiko Uyama, SRC

◆ 第1回スラブ・ユーラシア研究・東アジア・コンファレンス ◆

2月5-6日に北大学術交流会館で予定されている第1回スラブ・ユーラシア研究・東アジアコンファレンスは、仮プログラムも発表され (<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/eng/20090205/20090205-program.html>)、準備は佳境を迎えています。ペーパーは専用サイトにアップロードされています (パスワードについては青島にお問い合わせください)。

4会場と並行して6セッション、1特別セッションをおこない、計24パネル、80近いペーパーという、当初予定されていたものよりかなり大規模な催しとなりましたが、これも、東アジアにおいてスラブ・ユーラシア研究コミュニティを作ることが客観的に求められているということの反映ではないでしょうか。

なお、2010年ICCEESストックホルム世界大会のパネル提案も進行中です(2月28日締切)。AAASSなどの登録と違って、当面、パネルのタイトルと、報告者、討論者、司会者の名前だけ電子メールで proposals@iccees2010.se に送付すればいいようです。プロポーザルの文章を書き、パネリストのCVを送るのは次の段階だそうです(意外だったので組織委員会に確認しました)。アジア内外の同僚に声をかけて、積極的に登録することを呼びかけます。[松里]

プログラム要旨

セッション	第1会場	第2会場	第3会場	第4会場
2月5日(木)				
9:30-10:30	全体集会・開会式			
1	19世紀における朝鮮半島	ユーラシア安全保障における非伝統的争点	言語接触と異文化間コミュニケーション	近代社会におけるロシア正教の拡大
10:45-12:45				

2 14:00-16:00	2008年世界金融危機とロシア	ロシア性についての考察	オートノミーの終わり？プーチン以降のロシア地域政治	脱共産主義諸国におけるイスラム復興とその社会的・宗教的意味
3 16:15-18:15	寡頭制か個人権力か？21世紀におけるロシアとウクライナ	帝国の統合：宗教、軍隊、法制度	中央アジアとロシアにおける移民問題と安全保障	言語政治の比較考察
18:30-20:00 レセプション（アスペン・ホテル）				

2月6日（金）

4 8:30-10:30	ロシアの成長と世界経済	脱共産主義空間における地域紛争の地球的動態	ウクライナ人史とウクライナ地域史の間で	文学的手段としての言説と言語
5 10:45-12:45	ロシア人作家と東洋	ロシアは非民主化されたか？体制、選挙、政治文化	私的緊密圏におけるポリシェヴィキの観念の再考	ロシア、中国、中央ユーラシアにおけるエネルギー安全保障
12:55-14:10 韓国スラブ学会主催による昼食懇談会				
6 14:15-16:15	ロシアの対アジア政策の変容	ソヴェト後のロシア社会のダイナミクス	帝国の狭間で：跨境民族とフロンティア国家	プーチン、メドヴェデフ下の政治
16:30-18:00 特別セッション「東アジアにおけるスラブ研究の夜明け（1950 - 70年代）」				

◆ 国際ワークショップ「ポスト共産主義の変容」開催される ◆

12月5日に、国際ワークショップ「ポスト共産主義の変容：中東欧諸国とロシアの比較分析」が、センター主催でおこなわれました。このワークショップは、科学研究費補助金（基盤研究A）「旧ソ連・東欧諸国における体制転換の総合的比較研究」（代表：林忠行、2005～2008年）の一環として、アメリカ、イギリス、チェコから著名な研究者を招き、ロシアと東欧の政治経済の比較をめぐる議論がおこなわれました。

第一パネルでは、大串敦がロシアの執行権力の二頭制（大統領府と政府）は、ソ連時代のソ連共産党中央委員会と閣僚会議から発展したものであり、大統領府の役割は遠心的かつセクショナリズムの強い政府官僚組織の監督であると論じました。リチャード・サクワは、現代ロシア政治最大の問題として、政党の社会利益表出機能が弱いことに示されるように、制度化された立憲的な政治と、その背後にある権力体（「レジーム」）の間に大きな乖離があることだと論じました。討論者の松里公孝はじめ多くの参加者は、二頭制成立における偶然性の問題や、統一ロシアの役割、ロシア社会の「ユニークさ」などに関して活発な議論をおこないました。

第二パネルで、ピーター・ラトランドはロシアと中国の開発モデルを比較し、異なった発展程度から始まり、異なった経路をたどった両国の開発モデルが、着地点では、（いわゆるワシントン・コンセンサスとは異なる）「規制された市場」モデルに収斂してきていると論じました。また、上垣彰は、自身の考案した分析モデルに基づき、他の中東欧諸国と比較した際のルーマニアとブルガリア経済の「後進性」を分析しました。討論者の田畑伸一郎を含む参加者からは、ロシアと中国のモデルは本当に収斂しつつあるのか、国際経済に巻き込まれる度合いの低かった「後進的な」国々には、現在の金融危機の中では、利点があるのではないかとといった多くの質問がなされました。

第三パネルでは、マルティン・ポトゥーチェクが、緻密な経験的なデータに基づいて中東欧諸国の福祉制度の多様性を示し、特にチェコの福祉制度の発展経緯を跡付けました。質的・量的なデータと正確な比較分析の手法によって、仙石学は、そうした福祉制度の多様性を、政党・労組といった政治・社会的アクターの影響力によって説明しました。討論者の伊東孝

之はじめ多くの参加者は、制度的多様性の類型、労組の影響力の程度などの点に関して、様々な議論をおこないました（以上、敬称略）。

ワークショップの報告論集は近刊の予定です。[大串]

10:00-12:00

大串敦（学振特別研究員）「ソ連共産党中央委員会からロシア大統領府へ：ロシアにおける半大統領制の発展」

リチャード・サクワ（ケント大、英国）「臣民それとも市民：現代ロシアにおける憲法的主権行使への障害」
討論者：松里公孝（センター）

13:30-15:30

ピーター・ラトランド（ウェスリアン大、米国）「ポスト社会主義国と新しい開発モデル：ロシアと中国の比較」

上垣彰（西南学院大）「EU 統合と新加盟国の『後進性』：ルーマニアとブルガリアのケース」

討論者：田畑伸一郎（センター）

15:45-17:45

マルティン・ポトゥーチェク（カレル大、チェコ）「ポスト共産主義ヨーロッパでは福祉資本主義か粗野な資本主義か？」

仙石学（西南学院大学）「中東欧諸国における福祉国家制度と福祉政治：制度的多様性の政治的背景」

討論者：伊東孝之（早稲田大）

◆ 国際ワークショップ「人文学的アプローチによるポーランド ◆ 地域主義研究：言語・文化・芸術を通して考えるポーランドの周縁地域」 開催される



左から加藤氏、小椋氏、ホミャク氏、
シュミット氏

東欧革命から20年目を迎える本年1月10日、上記のワークショップが東京大学で開催されました。本企画は地域研究コンソーシアムの主催で、センター、日本学術振興会「人文・社会科学振興のためのプロジェクト」研究領域V-1第2グループ「越境と文化」、東京大学文学部現代文芸論の共催によりおこなわれました。また内容的な関連から、北海道大学総長室重点配分経費「公募型プロジェクト研究等支援経費」（代表：野町）も一部使われました。

「ポーランドの周縁部」という、あまり馴染みのないテーマであったにもかかわらず、研究者・一般の方を合わせて50人近くの方が参加されました。また、在日ポーランド共和国大使館からヤドヴィガ・ロドヴィッチ大使もお見えになり、ボジェナ・ソハ文化担当一等書記官からはご挨拶をいただきました。大使館は本企画の後援を引き受けてくださっていたのですが、大使館の方々のご来場され、ご挨拶までいただけるとは予想外の名誉でした。

司会進行役の小椋彩氏（早稲田大）からワークショップの目的と概要が説明された後、「現世代」研究者の沼野充義氏（東京大）の、次世代研究者へのメッセージとなる「中心・周縁・中間—スラヴ地域研究の活性化に向けて」と題された基調講演でワークショップが幕を開けました。

研究発表は3部構成（文学・芸術・言語）でした。文学セクションでは、まず小椋彩氏が「若きポーランド」派の文学における東部クレスシ地方のアンビヴァレントな表象について、続いて加藤有子氏（日本学術振興会特別研究員）が多文化都市としてのルヴフとポーランド語雑誌『シグナウィ』について、最後に井上暁子氏（日本学術振興会特別研究員）がドイツとポーランドの国境地帯の作家・パヴェウ・ヒューレの処女作『ヴァイゼル・ダヴィデク』についての研究報告をおこないました。



マイエヴィッチ氏

芸術セクションでは、小川万海子氏（多摩市立関戸公民館）が「インスピレーションの源」としての東部地域について、特にユゼフ・ハウモンスキとヤン・スタニスワフスキの作品について報告をおこないました。次に加須屋明子氏（京都市立芸術大学）による、冷戦期のシロンスク地方（特にカトヴィツェ）における前衛芸術運動についての分析の報告があり、続く久山宏一氏（東京外国語大学）は、ウヰムコ人の傑出した画家・ニキフォルについての映画作品『ニキフォル：知られざる天才画家の肖像』に関し、クラウゼ夫妻の演出歴、フェルドマンの演技歴、「芸術家の伝記映画」などという多角的な視点からの研究報告をおこないました。

言語セクションでは、まず論文を本企画にお送りくださったイェジ・トレデル氏（グダンスク大学）による「カシュブ語文化の最新動向」の概説を野町（センター）がおこないました。続いて、野町によるカシュブ人社会活動家アレクサンデル・ラブダのカシュブ語文語形成への貢献についての研究報告がありました。

尚、言語セクションでは2人のゲストスピーカーによる特別講演が企画されました。まず、ウヰムコ語教育の先駆者であるミロスワヴァ・ホミャク氏（ウヰムコ協会）が、ポーランドの少数民族ウヰムコ人の言語文化の概説と教育の現状と諸問題について報告されました。続いて、世界的な言語学者であり、センターの外国人研究員でもあったアルフレッド・マイエヴィッチ氏（アダム・ミツキエヴィッチ大学）が、ポーランドの多民族国家性と多言語性について、独自の統計資料と多数の文献を用い詳細に報告されました。

テーマの斬新さのみならず、若手研究者による質の高い報告と学界を代表する「現世代」研究者の広い視野に立つ基調講演、および本国ポーランドからの特別講演が組み合わせられることにより、本企画は予想以上の成功を収めたと言えるでしょう。

ワークショップ当日と翌日のエクスカッションでは、ポーランド大使館経済部のマウゴジャータ・シュミット氏が通訳として参加されました。シュミット氏は金沢大学、東京大学での留学経験を持ち、また筆者がワルシャワ大学講師を勤めていたときの「教え子」ですが、「教え子」などというのが大変おこがましいほどの大活躍ぶりでした。

ワークショップの翌11日、報告者数人はホミャク氏とマイエヴィッチ氏と共に「はとバス」で東京観光をし、12日にお二人は帰途につかれました。

目下、企画代表の小椋氏と野町によるワークショップ報告集の編集作業がおこなわれています。予定されている報告集には、海外も含めて問い合わせが既にあり、編集作業が急がれます。

最後になりますが、本企画を採択してくださった地域研究コンソーシアム、共催および後援を引き受けてくださった関係者の方々、そしてご来場の皆様に、この場をお借りしてお礼申し上げます。[野町]

◆ 2009 年度鈴川・中村基金奨励研究員募集 ◆

鈴川・中村基金の奨励研究員制度を利用して、これまでに多くの大学院生がセンターに滞在し、センターおよび北大附属図書館の文献資料の利用、センターで開催されるシンポジウム・研究会への参加、センターのスタッフとの意見交換をおこない、実りのある成果を挙げてきました。

2009 年度も昨年同様に募集をおこなう予定です。募集人数は数名とし、助成対象者は原則として博士後期課程以上の大学院生です。助成期間は1週間以上3週間以内です。滞在期間は、スラブ研究センターの行事をご勘案の上、決めていただければと思います。最終的な日程の調整は、ホスト教員とおこなうことになります。行事につきましては、以下をご参照ください。
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2009.html>

募集の開始は2月中旬頃、締め切りは4月末を予定しています。募集要項・応募用紙をご希望の方はセンターまでご連絡ください。なお、募集要項・応募用紙はセンターのホームページでも参照およびダウンロードできます。[長縄]

◆ 専任研究員セミナー ◆

ニュース前号以降、次の専任研究員セミナーが開かれました。

11月13日：長縄宣博 “Challenge and Leverage: Muslim Travelers from the Volga-Ural Region to the Ottoman Empire at the Turn of the Nineteenth and Twentieth Centuries”

センター外コメンテータ：守川知子（北大文学研究科）

このペーパーは、ムスリム社会と国家（帝国）の相互作用という長縄氏の一貫したテーマを、メッカ巡礼という広域的・動態的なトピックに沿って展開したものです。巡礼が必ずしもムスリムの一体感を醸成するとは限らず、出身国・地域ごとの違いを意識させる機会でもあったこと、ロシア帝国が巡礼者を「汎イスラーム主義」の文脈で警戒しつつも管理・保護を図ったことを明らかにし、検疫態勢や、ロシア・ムスリムのオスマン帝国観にも論及しています。旅行記、テュルク語の新聞、文書館史料などを駆使した力作ですが、セミナー参加者からは、論理構成や説明の分かりやすさに難があるという指摘もありました。コメンテータからは、ガージャーナル朝イランの巡礼を専門とする立場から有益な論評をいただきました。[宇山]

◆ 研究会活動 ◆

11月6日 本村眞澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）「旧ソ連の石油・ガスをめぐる新情勢：ロシア＝グルジア紛争の影響はあるのか？」（北海道スラブ研究会）

12月4日 A. ポポフ（モルドヴァ外交協会理事）「南オセチア紛争がモルドヴァ政治及びブリドニエストル問題に及ぼす影響」（センターセミナー）

12月8日 Y. ラブキン（モントリオール大、カナダ）“The Emergence of the Secular Jew in Russia”（センターセミナー）

松里公孝（センター）「台北とテヘランでの国際学会に参加して」（昼食懇談会）

- 巽由樹子 (東京大・院) 「近代ロシア絵入り雑誌における女性と家族のイメージ」(鈴川・中村研究員報告会)
- 12月18日 松里公孝 (センター) 「環黒海における政治と宗教:非承認国家問題と正教外交」(北海道スラブ研究会)
- 12月22日 B. クズネツォフ (ロシア国立経済大) “Russian Economic Development: Before and after the Crisis of 2008” (センターセミナー)
- 1月8日 酒井啓子 (東京外国語大) 「現代中東政治研究動向と権威主義体制のしぶとさ」(客員研究員セミナー)
- 1月15日 胡振華 (中央民族大学・教授) 「中国と中央アジア諸国との民族間交流」(北海道スラブ研究会)

19世紀の中国における世界地理への関心と 林則徐著『俄羅斯国記要』

セルゲイ・ヴラディ (ロシア科学アカデミー極東支部歴史・考古学・
民族学研究所/センター 2008年度特任教授として滞在)

明朝初期における鄭和 (生 1371 年 - 没 1435 年) の大航海のあと、ほとんどの中国の学者は外の世界に背を向けて内省に没入した。しかし、非中華世界に対する好奇心を完全に抑え込むことはできなかった。19世紀までに中国は、外の世界と中国に勝る発展に関して、時宜にかないかつリアルで、信頼できる、詳細な文献を必要とした。

19世紀中盤は中国史においてきわめて重要な時代だ。というのも、この時代にイギリス・アメリカ・フランス・ロシアなどといった西洋諸国との交わりが増えたからである。この交わりは、ヨーロッパ諸国の積極的な関与と、西洋諸国の侵略に抵抗するための中国側の消極的な試みから成っていた。しかし、1840年から1850年までのアヘン戦争が、清朝にとてつもない打撃を与えた。

夷狄の国々に対する中華帝国の優越性を宣伝する、伝統的な儒教原理の絶対性についての疑いが、中国の知識人の間で芽生えた。一番先見の明のあった知識人の何人かが、西洋諸国の力の源に目を向けた。彼らは国家制度、経済運営や教育の制度、軍事力の源泉について入手しうる情報を調べ始めた。調査した知識人たちは「夷狄」から学ぶに値することが多いのに気がついた。

19世紀前半に西洋諸国と対決したことは、さらに広い世界についてもっと現実的な認識をするよう、中国人を刺激した。アヘン戦争の前には、中国人は伝統的な中華圏の向こうの世界についてはわずかな注意を向けていたにすぎない。アヘン戦争の間、海外の国々に関して中国側で知識が不十分なことが、戦略的に不利であるとはっきりとした。1840年代には、さらに広い世界についての知識が西洋の侵略から中国を守るのに重要となり、こうした考えを共有していた一握りの士大夫が外国を深く研究した。数は少ないが影響力のあるこうした中国人のグループが、西洋に関する中国側の知識を広げようとしたのである。これは、中国が生き残るのにそうすることが必要だという信念に基づいていた。林則徐 (生 1785 年 - 没 1850 年) や魏源 (生 1794 年 - 没 1856 年)・徐繼畲 (生 1795 年 - 没 1853 年) による総合的な報告書、それと他の筆者による短文がこうした新しい見方の重要性を提起した。

中国近代史において中国の「西洋への反応」は主要テーマである。この反応は単純なものではなくて、西洋に関する中国側の知識はしばしば伝統的な概念を濾過したものであった。

西洋に関する新知識を吸収し始めた頃にも、古代の世界観の重要な部分がまだ力を持っていたのである。

18世紀のほぼ全期間、中国の知の潮流はいわゆる書院によって支配された。書院の学者たちは政治を論じるのを避け、文献学的な研究やテキスト批判に没頭していた。清朝の衰退が明白となって、士大夫が同時代の政治問題を案じ始めた19世紀の第2四半紀まで、書院の支配的な地位が脅かされることはなかった。

19世紀初めには「社会にとって有用な学問（経世之用）」すなわち経世致用の学に対する関心が再び見られるようになった。この学派は17世紀に栄えたものの、乾隆帝（在位1736-1795年）による知識人階級への弾圧政策が主因となって、18世紀には保守的な学派に比べると影が薄くなっていた。

19世紀における経世致用の学の再登場は、現実的な方法で平和と繁栄を国家と社会にもたらす道徳的責務への、個人の感情的な欲求に重きを置いた古典的な修学による、「現代文（今文）」の復権が証明している。

この知の復古派（記者注：今文学派・公羊学派・常州学派と呼ばれる）で重要な学者たちが、壮存興（生1719年 - 没1788年）と彼の孫の劉逢禄（生1776年 - 没1829年）、多作な龔自珍（生1792年 - 没1841年）と包世臣（生1775年 - 没1855年）、辺境統治に通じた姚瑩（生1785年 - 没1853年）である。この学派にはアヘン戦争で重要な役割を果たした林則徐や黄爵滋、改革派としてのちに中国と西洋の外交にまつわる問題に何よりも関心を抱いた、魏源や馮桂芬（生1809年 - 没1874年）たちもいた。

『皇朝経世文編』の前文で、魏源はこの学派の基本的な二つのアプローチ方法を定めている。すなわち、いま現在に重きを置いて、現実への応用の重要性を強調することである。

今文学派で興味が高じていた問題の一つに、内陸アジアと沿岸部の辺境問題がある。南東の沿岸部から西洋の侵略が高じてくると共に、19世紀の第2四半紀には、中国の治政の焦点は内陸アジアを離れ、新技術を持つ「夷狄」がやって来る海域世界へと大きく移動した。

（関天培、梁廷枏、林福祥らが）海防を論じた初期の書物は、当然のことながら広東の沿岸部に焦点を当てている。幾人かの今文学派の士大夫たちの最大の関心は海の向こうの西洋を理解することだった。（記者注：湖広）総督の林則徐にとって有効な方法の一つは翻訳を用いることだった。魏源は後に公立の翻訳機関の設立を説いた。郭嵩燾（生1818年 - 没1891年）は1859年の覚書で外国語を教授する公立学校の創設を提案した。西洋の歴史・地理学・法律・政治情勢の情報が集められた。こうした中で興味深いのは、特に際立った影響を与えた世界地理の研究であろう。

世界地理への関心は、よくわかっていなかった西洋世界や実際の地球全体の知識を得ることを目的とするように一見みえる。しかし、当時緊急に求められていたことを考慮すれば、こうした関心は中国自身の知識と能力を強化するための動きと見ることもできる。言い換えると、西ヨーロッパの野蛮な国家との戦争を経て、当時の中国の官僚や知識階級は敵を理解し、ヨーロッパとはどのようなところか探究することを緊急に求めている。正しい解答を導くことが必要だったのだ。このプレッシャーのもとで世界地理への関心が高まった。

1840年以降、中国の知識人は徐々に世界地理の問題に注意を払うようになり、1860年代までには20冊以上の本が著された。

西洋諸国から得た知識を最初に応用した人物の一人が、すぐれた国家官僚で学者でもあった林則徐である。彼はアヘン貿易への反対と、外国の侵略に対する激しい抵抗の事績で顕彰され記憶され続けている。私が見るところ、19世紀の中国の社会政治思想の発展、それに西洋科学の業績を利用することの必要性に関する見識と思考システムを構築した林の貢献もまた際立っている。後に「海外情報」の習得論と呼ばれるこの考えで代表的な著作が『四洲志』(1)、

『華事夷言』(3)、『奥門月報』(4)、『俄羅斯国記要』(2) などである。

林則徐の『俄羅斯国記要』について、まだ学者たちは注意を払っていない。一風変わった木版印刷の19世紀のこの書物は、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルグ支部 図書館の中国語手稿部に保管されている。林則徐はこの本を、勅命により欽差大臣として送り込まれた広東での在任中(1839年から1841年)に書き上げた。当時アヘン貿易が最盛期を迎えていた華南では、西洋諸国の影響と中国への進出が激しくなっていた。



林則徐著『俄羅斯国記要』の最初の頁

『俄羅斯国記要』は当初、林則徐の『四洲志』の独立した一部分であった。そして『四洲志』は、卓越した中国の思想家で詩人・歴史家の魏源がのちに著した『海国図誌』(6)の一部として取り込まれることになる。『海国図誌』のメインテーマについて魏源は次のように書いている。「この本の目的は何か？それは夷狄同士の争いをいかに利用し、いかにして夷狄同士の均衡を我らに有利なように作り上げ、夷狄を制するために夷狄の優れた技術を利用するか、を示すことである。」

魏源は「夷狄」を以って夷狄を制するという古代の思想を展開して、夷狄に反撃して追い払うために夷狄から学ぶ、という新しい意味づけを与えた。

1882年には、政府高官の姚瑩(生1785年-没1853年)がロシアを論じた二作と共に、林則徐の『俄羅斯国記要』を収めた『俄羅斯記要』が中国で出版された。

林則徐のロシアに関するアピールはただの偶然なものではない。ロシア帝国は中国と長大な国境線で接しており、清朝の支配層はロシアに高い関心を抱いていた。(訳者注：中国にとって)ロシアはイギリスや他の西洋諸国に対抗するときに有効な道具として可能性があるだけでなく、大国だが弱く貧しい国家が、ヨーロッパの工業や軍事を真似て受け入れることで、他のヨーロッパ列強といかにして肩を並べることができたかの好例であった。後に中国の近代化論者にとって有名となるピョートル大帝や、破廉恥で悪名高いもの有能なエカテリーナ2世でさえ、他の国民から技術を学ぶことの有用性を認めていたことに林は気がついた。最終的には、ロシアは強大となっていた。これは後の変法自強を唱える者たちにとって説得力のある話であった。

1880年代初めにこの著作が出版されたことは当然のことだ。最初に世に出た時には中国社会の注目を集めなかったものの、19世紀後半には上記の林則徐や魏源、徐繼畲たちの著作に「第二の誕生」の機会が到来した。日本では明治維新の間に、彼らの著作がとりわけ社会思想の発展に影響し、佐久間象山や吉田松陰、西郷隆盛といった全世代を熱狂させた。彼らの著作は最初に中国で出たにもかかわらず、日本で最初に関心を持たれ、中国の知識人も興味を示すようになったのはやっと19世紀後半になってからである。

ようやく1860年代になって、西洋諸国、そしてこれらの国を描いた書物への関心が刺激された。これは、いわゆる変法自強論に投じた中国の官僚の試みに表われている。

中国の歴史家たちは、林則徐が西洋諸国に関する本を書いた時の参考文献の一つを特定している。それはヒュー・マレーの『世界地理全書』(5)である。この本は19世紀前半に出版されたもので、全世界についての最新情報を載せていた。

林則徐の本は単に参考文献を逐語訳したものではない。林の本の課題の一つはロシアの現在の力を示して、その力の源を探究しようとすることにあった。全体的に、この本はロシア帝国を内外の境界で諸地域に分けて、各地域の兵力、気候の詳細な特徴、信仰宗派、その地方の手工業、住民の税金、歴史の論点などを素描している。

地理の見方や政治や歴史の経緯について多くの間違いがあるにもかかわらず、この本は、多様な習慣、社会、技術の進歩を特徴とする、明確な個性を持つ国々から成る世界を示した。

外国からのロシア観を知ることは重要であり、ロシアのイメージの起源や様式、現在の展開をたどることを可能にする。また、ロシア国内の歴史と外国の歴史に対する理解の視野をも広げるものである。このことは、中露関係史のいくつかのエピソードをつまびらかにするのも役立つ。

『俄羅斯国記要』はロシアのことだけを扱った、中国における最初の出版物の一つであることは指摘しておくに値しよう。

19世紀中国の社会思想で上記の進歩的な著作が果たした歴史的な役割は、彼らが活動した時代を大きく越えるものだった。これらの著作はあまり研究されなかったものの、同時代の人と後の世代の社会思想への良い影響が徐々に評価されるようになった。イギリスと中国が衝突する非常に不向きな状況下だったが、こうした本は外の世界や西洋の科学技術の到達点に対して関心を示した最初のものとなり、孤立政策への対抗軸となった。

中国の歴史における危機の時代にあって、中英関係の震源地にいて、主に儒教の立場に則って務めていたにもかかわらず、林則徐が優れていたのは、彼が伝統的な偏見に囚われずに、冷静に外国人(夷狄)たちの科学技術の優位を評価していたことだ。外国の侵略に立ち向かうため、中国が西洋科学の業績を取り入れて習得しなければならないことを彼は認識していた。

(国際取引の隆盛や国際的な労働力市場への中国経済の統合も含んだ) 中華人民共和国の外交政策を研究する現代の歴史家たちは、この問題についての先駆者として彼を引き合いに出す。

19世紀中国の社会政治思想の代表的な人物たちの伝記と活動をさらに分析することは、アジア諸国の社会の発展にも大きく影響した、中国の社会政治思想の発達の全般的なプロセスを、もっと全面的に解明することにつながっている。

(英語から麻田雅文訳)

参考文献

- (1) 林則徐『四洲志』20巻、王錫祺編『小方壺齋輿地叢鈔』上海、に所収。
- (2) 林則徐『俄羅斯国記要』、『俄羅斯記要』上海、1882年(木版)、に所収。
- (3) 林則徐『華事夷言』上海、1931年。
- (4) 林則徐『澳門月報』上海、1954年。
- (5) Murray, Hugh. *The Encyclopedia of Geography*. In 3 vols. London, 1834; 1st rev. ed. Philadelphia: Carey, Lea and Blanchard, 1837.
- (6) 魏源『海国図誌』揚州、第一版50巻・1844年、第二版60巻・1847年、第三版100巻・1852年。

極私的・ハーバード大学図書館案内

半谷史郎

ハーバード大学デイビス・センターの滞在期間も、早半ばをすぎました。燦々と輝く太陽と爽やかな空気の夏。鮮やかな紅葉黄葉と木の実を食むリスが目を楽しませてくれた秋。季節は移ろい、日の短い暗く寒い冬が始まろうとしています。

春先にITPの公募を見た時は、正直なところ、アメリカもハーバードも絵空事でした。そ

れが、訳している本の原著者がいるからという軽い動機で応募して見れば、思いがけず採用され、後は自分でも何が何だか分からないまま、気がついたらアメリカ生活がはじまっていた。

こちらには6月19日に到着したのですが、ちょうど卒業式も終わって夏休みに入ったところで、センターも閑散として休眠中。結局、週2回、夕方に英語の夏期講習に通うほかは、与えられた自分の研究室で、ずっと日本から持ち越した翻訳の仕事をしていました。翻訳とはいっても、意味を取りかねるところやら引用箇所の確認をするために、数多くの文献に当たり直す必要がでてきます。この過程で、噂にたがわぬハーバードの図書館の充実ぶりに触れ、大いに驚かされました。そのあたりのことを少し詳しく書いてみたいと思います。



冬眠前の食いだめと思いきや、その後、雪原を走り回る姿を見て驚きました(2009. 2. 3)

訳していた本は、スターリン時代のソ連の民族政策を扱った Terry Martin の *The Affirmative Action Empire* という 500 ページ近い大著。6人の共訳で、私が監修者です。駆け出しのぺいぺいの私では、「監修＝半谷史郎」と銘打っても何の箔付けにもなりません。結局のところ掛け値なしの実力勝負、正確な分かりやすい訳文をつくらないと監修者の責任は果たせないわけで、疑問があれば煩を厭わず図書館に走りました。こう書くと大層なことに聞こえますが、根が「ほじくり屋」なので調べることは全く苦にならず、むしろ世界最大級の大学図書館を使い倒して調べものをすることが快感でもありました。

翻訳していた本の性質上、1920年代から30年代のソ連の政治史に関する文献が最もお世話になった蔵書です。この分野は自分できちんと研究したことがなく、珍書凡書の判断はつきかねるのですが、まずは探す文献の多くが架蔵されていることに驚きました。また、ちょっとした調べものや手堅い論証には不可欠な基本文献というのがあります。この時期のソ連政治史なら、党大会の議事録や党の理論誌『ポリシェヴィク』などです。これが頭から欠けることなく書棚にずらっと揃っていて、現物を手に取るのも借り出すのも自由というのも、大いに助かりました（さすがに新聞は現物でなく、すべてマイクロでしたが）。本棚の肥やしが効いているとは、まさにこのことです。調べものの合間に、ちょっとした好奇心から『ポリシェヴィク』の1941年8月号を抜き、スターリンの有名な開戦演説（「同志諸君、市民のみなさん、兄弟姉妹たちよ、……」で始まるやつ）を当時の活字で初めて読んで、無邪気に感心していたこともあります。こうした調べものの合間に充実したよそ見ができる環境は、後々思わぬ発見発想につながるのではないかと思います。そして、それもこれも、現物の持つ迫力あればこそです。

私が図書館の書棚で手にした1920年代から30年代の本は、蔵書印を見ると、戦後の特に1960年代から70年代に納入されたものが目に付きました。冷戦の始まりとともに戦略的にソ連研究が行われたことをうかがわせます。ソ連に駐在する機関が現地で購入したのもあれば、西側に亡命した人から買い取った蔵書もあったでしょう。表紙にソ連の図書館の蔵書印がいくつも押された雑誌には、想像力を刺激されました。図書館の基本蔵書として購入されたものの、次第に場所ふさぎのお荷物になり、払い下げを繰り返した挙句、ソ連国内では引受け手がなくなり、最後は米ソ文化協定の学術交流で、アメリカに安住の地を見つけたという流れが見えてきます（好奇心で色々見てみると、最初の蔵書印が帝政時代という雑誌もちらほらありました）。払い下げにならない貴重な雑誌は、レーニン図書館からマイクロ化して取り寄せています。初めはそんなことに気づかず、珍しい雑誌を持っていることにただ感



研究室の表札

謝していたのですが、ある時、雑誌の表紙に書き込まれた整理番号やマイクロリーダーの画面の印象から、これはレーニン図書館でつくったマイクロだと気づいて、疑問はすべて氷解しました。米ソ間には文化協定があって、研究者の交流があったというのは紙の上の知識として知っていました。ですが、図書館の蔵書という具体的な形でその事実を示されると、なるほど、こういうところが研究の基礎体力の違いになっているのだと改めて痛感させられました。

10月に入って翻訳の仕事に目鼻がつくと、次は、11月下旬のAAASSでの発表の準備です。「第一次大戦とロシア」というパネルで、シベリア出兵に関する日本の史学史を話すことにしたので、情報収集のために一時帰国。ロシア史研究会の年次大会（10月11日、於：愛知県立大学）に顔を出し、共通論題「シベリア出兵再考」で大いに勉強させていただきました。アメリカに戻ると、まずは本の総入れ替えです。貸出冊数が無制限なのをいいことに、調べものの度に借り出してそのまま机の周りに積み上げてあったソ連史がらみの本の山を一掃すると、今度はシベリア出兵に関する日本語の本を大量に仕入れてきました。書庫をうろついて、めばしい本を片っ端から背中リュックに詰め込んでいくと、これまた山のような量になり、貸出手続きの際、司書の人に驚かれました。

この問題は全くの初心者なので、ロシア史研大会で配布された原暉之先生作成の「日本語文献リスト（1990年代以降）」を文献探索の手がかりにしたのですが、挙げられていた30点弱の文献のほとんどが、燕京図書館（Yenching Library）であっけなく見つかりました。燕京図書館は、日中韓を中心とするアジア地域研究の拠点です。ざっと見たかぎりでも、日本語の蔵書は、生半可な日本の大学図書館では及びもつかぬほど充実しています。件の文献リストの本で見つからなかったのは極東共和国の関連本に集中していたのですが、これは英語やロシア語の本の方がずっと詳細・正確で、わざわざ二番煎じの日本語の本を購入する必要はないと判断しているからでしょう。少なくとも、日本語がその分野の最先端であるような本は、ほぼ間違いなく購入しているようです。たとえば、参謀本部が作成した公式戦史『西伯利出兵史』は、シベリア出兵の基本史料の一つです。戦前は極秘扱い、戦後も長らく幻の書だったのですが、1972年に出た復刻版の「限定300部のうち49」を、燕京図書館は発行から3ヵ月後に購入しています。ちなみに、この本には「1970年大阪万博記念基金により購入」というシールが貼ってありました（こちらの蔵書には、この手の個人や団体の名を冠した購入基金の情報シールがよく貼ってあります）。アポロ月の石で儲けたお金の山分け基金でしょうか。

燕京図書館には、研究を離れた息抜きの本もお世話になっています。最新の新刊書や娯楽色の強い本は無理ですが、ぶらぶら棚から棚へ歩いていると面白そうな本が次々見つかります。また日本政府が力を入れているクールジャパンではないですが、研究資料としてマンガも購入しています。蔵書印を見ると、収集が始まったのはここ10年くらいらしいです。多くは郊外別置の書庫保管のため、全貌は分かりませんが、手塚治虫全集だとか中公文庫になったのやら、評価の定まった「古典」を中心に収集しているようです。

AAASSでの発表を終えて戻った翌日、早速また半日ほどかけて、研究室の机や本棚に山と積んでいたシベリア出兵がらみの本を一掃しました。留学の残る期間、こうした本の山をつくっては崩しの作業を、まだ何回も繰り返すことでしょう。

（2008年11月27日 Thanksgiving Day の祝日に記す）

学 界 短 信

◆ 台北とテヘランの学会に参加して ◆

松里公孝（センター）

台北

昨年の10月、日本のスラブ研究者にはあまり縁がないと考えられる台湾とイランで行われた国際コンフェレンスに立て続けに参加する機会を得た。

台湾のそれは、旧共産圏の科学アカデミーに該当する「Academia Sinica」の政治学研究所が主催した「準大統領制と民主制：制度選択、パフォーマンス、進化」（10月17-18日）である。春頃に同研究所の呉玉山（ウ・ユシャン）所長から声がか



馬英九台湾総統と共に

かり、旅費を持ってくれるということで参加を決めた。おそらく2006年にデモクラチザーツィヤに載った私の論文（東欧コーカサス5カ国を比較して、体制移行の空間動態と準大統領制のあり方の因果関係を考察したもの。短縮版は講座『スラヴ・ユーラシア学』第1巻、講談社、2008年に収録）が注目されてのことであろう。しかし、その後、私は準大統領制を本格的には研究していないので、これを機会にオレンジ革命後のウクライナの政治情勢を準大統領制のプリズムを通して見てみようと思ったのである（したがって私の報告は、総論のセッションから各論のセッションに移された）。ウクライナ政治について考えるのも上記の論文以来3年ぶりである。

このコンフェレンス自体は毎年行われるもので、今年はたまたま準大統領制を専門とする呉所長自身が組織者だったので、このテーマとなったのである。来年は市民社会がテーマで、SRCとも縁が深いハーヴァードのグジェゴシュ・エキエルト先生などと共催するそうである。台湾など滅多に行けない国なのに、新学術領域の面接などが立て込んでいたので、前夜遅く台北入り、終了後翌日早朝に東京に帰ってくるという不運な滞在であった。準大統領制と並んで非承認国家を専門とするオレフ・プロツィク（彼も2006年にSRCのコンフェレンスに来た）は、何日間か台北に滞在してプリドニエストルのトークをして帰ったが、うらやましい。言うまでもなく、非承認国家問題は台湾にとってアクチュアルな問題である。呉所長も、後で私の非承認国家についての最新原稿を読んで、プロツィクと一緒に報告させられなかったことを残念がっておられた。ところでこの呉所長はユニークな人で、本来は準大統領制そのものを専門とするディシプリン系の政治学者なのだが、旧社会主義諸国の政治について地域研究者並みに知っているのに驚いた。帰国後、呉先生のなかだちで、台湾のスラブ研究者



アカデミア・シニカの文系棟

ある。このグループは、過去 10 年間にこのテーマで 3 冊論文集を出した。今回のコンフェレンスで 4 冊目を出すことになる。すでに出ているものは、それぞれがヨーロッパ、ヨーロッパ以外、中東欧にフォーカスしており、文字通り風潰しに研究空白国を埋めつつある。移行期政治を比較政治的に斬る視角はほかにもあるが、たとえばポピュリズムを視角とするグループなどは、(私は貴重だと思うのだが) AAASS などでも小さな会場で細々とやっている感が強いので、この熱気は貴重である。

コンフェレンスのタイムテーブルを詰めて、馬英九台湾総統を表敬訪問する。これも恒例行事らしく、アカデミーのステータスの高さを痛感する。馬総統は、マスコミのカメラが回っている間は通訳付きで中国語で話したが、そもそもハーヴァード・ロースクールで教育を受けた人だから、マスコミが去ると通訳よりもはるかに素晴らしい英語で研究者の質問に答える。準大統領制の概念にも通曉しており、前総統との違いを強調した。陳水扁時代には、民進党が議会多数派を失っても、総統は自分が望む候補を首相に任命し続け、またその結果、何の憲法上の制裁も被らなかった。これが、はたして台湾を準大統領制と呼んでよいのかどうか疑われる理由であった。馬氏は、総統選挙、議会選挙のいずれに際しても、国民党が議会多数派にならなかった場合は、野党から首相を任命すると公約した。実際には国民党が議会選挙でも圧勝したので、馬氏がこの公約を本当に守ったかどうかは確かめようがない。しかし、私たちとの会話では、馬氏は、総統、首相、議会がよく話し合っただけで協調の精神で統治するのが中華民国立国の精神であり、台湾は強引なリーダーシップには向かない。2 年くらいいたら、首相任命の際の議会の承認を総統に義務付けるような憲法改正を提案するかもしれないと話していた。日本では民進党の衰退がしばしば報道されるが、「ブルー(国民党)か、グリーン(民進党)か」が市民の政治的な会話に定着し、新聞もテレビもこの 2 つに系列化されている有様は、アメリカ合衆国に似た典型的な 2 大政党制社会である。

アカデミーは台北の郊外に広大な敷地を持っており、ここに研究所、ホテルなどが集中している。文系棟の立派さにも驚いたが、会議場の素晴らしさに 2 度驚く。SRC の国際会議は世界最高水準の組織性と配慮を誇ると考えがちだが、韓国や台湾と比較すれば、必ずしもそうとは言えない。これはスタッフの努力不足のためではなく、日本の予算制度の硬直性のため

ともコンタクトをとることができ、そのうちお一方は 2 月のスラブ・ユーラシア研究東アジア学会に参加することになった。

台北コンフェレンスは、「ミスター・セミプレジデンシャルイズム」ロバート・エルジー、「ミセス・セミプレジデンシャルイズム」ソフィア・モンストロップをはじめとして、世界の代表的な専門家をほぼ網羅していた。このような大規模なコンフェレンスを COE もなしに通常予算で行ってしまうのだから、研究所の資金力に驚かされる。ただし、旅費を米国風に小切手で払うのには閉口した。日本においては小切手の換金手数料が異常に高いので。

「第三の波」に乗って民主化された国々の 3 グループ、旧社会主義国、旧フランス、旧ポルトガル植民地のいずれにおいても準大統領制が多数派となったので、準大統領制の研究者は、いま、政治学の世界で最も鼻息の荒いグループのひとつで

めであり、また大会議室の天井が低すぎてヴィジュアルな現代的報告に対応できないからである。いま進行中のSRCの改修に際して、私は、2階ぶち抜きにする、当該部分だけ屋上を上方に釣り上げるなどの形で何とか大会議室の天井を高くしようとしたが、そんなことをすれば建物全体が脆くなるとの予測から断念せざるをえなかった。なお、SRCも含めてアジアのコンフェレンスは皆そうだが、軍隊のように朝昼晩一緒に食事をとらなければならないので、台湾の麺料理のQ感を楽しみたかった私としては残念であった。しかしこの軍隊方式は、漢字の看板が読めない欧米人には好評なのである。

テヘラン

日本に帰って10日もたないうちに、今度はテヘランに向かわなければならない。イランの外務省付属の政治・国際関係研究所が毎秋行う中央ユーラシア関係の国際コンフェレンス（10月28-29日）で報告するためである。コンフェレンスの前日に現地の日本大使館員とランチを共にし、相川一俊公使、片平参事官からイラン政治についての貴重なレクチャーを受ける。日本の外交官には、滞在地を内面的に理解しようと努力



コンフェレンスの開会式でのモッタキ外相の挨拶

し、滞在地を好きになってしまう人が多い（これは日本人研究者にも共通する、欧米人にはない特性である）。イランに対する日本の政策も、必要な範囲で苦言を呈しつつも、他方ではあまりにも奇矯な制裁には距離を置きつつ（コンピューターをイランに持ち込むとウィルス・バスターが即座に使えなくなるとか）、なんとか同盟国アメリカとイランの間を橋渡ししようというものではないか。ホメイニ革命以来、イランにはアメリカ大使館すらない状態なので、国際社会の対イラン政策を決めるうえで日本の責任は大きい。

2006年のスラブ研究センターの国際シンポジウムに招かれたハニ氏が、イランのユーラシア研究の水準を代表する上記の国際コンフェレンスに毎年SRCの教員を招いてくれていたのだが、日程が合わずにこれまで不義理をしていたのを埋め合わせる必要があったのである。今年のテーマは、南オセチア紛争を受けて、「コーカサスにおける衝突：起源、諸次元と含意」だった。ちょうど私は、韓国の新雑誌 Eurasian Review に依頼されて、南オセチアを除く非承認国家3国の内政を比較する論文を書き上げたところだったので、それに基づいて報告することにした。飛行機代は科研費「ユーラシア秩序の新形成」から出してもらい、現地滞在費は主催者もちであった。

32人の外国人報告者のかなりの部分は毎年参加する常連組であり（だから、コーカサスを扱うコンフェレンスなのにコーカサスのことを何も知らない人も多かった）、新規参入組は、希望者がイランの在外公館にアプライして選抜されたようだ。外国人報告者のかなりの部分は滞在費だけでなく飛行機代も支給されたらしいから、イランの国力には驚く。職業的には、研究者が3分の2、ジャーナリストや元外交官が3分の1といったところではないだろうか。

このコンフェレンスは、最初にモッタキ外務大臣が挨拶することにも示されるように、イラン政府が高く位置づけているものである。プーチン時代のロシアもそうだったが、大統領がタフガイである場合は、外務省は柔和になって対外バランスを取ろうとする傾向があるが、今日のイランもそうなのかもしれない。外国人の国別内訳は、中央ユーラシア絡みでイランが接触を持ちたいと考えている国々を反映して面白いものだった。グルジアが3名（SRCとなじみの深いサニキゼさんもいた）、ロシアが4名（岩下氏の友人の東アジア専門家ルキン氏もいた）、アルメニアが2名、これらが紛争当事国・準当事国である。そのほかは、中央アジアが4名、東欧が2名、トルコが2名、インドが1名、ウクライナが2名、日本が1名、残りはすべて欧米で、意外なことだがこれが最大のグループである。参加者の誰かが言っていたが、紛争の余燼冷めやらぬいま、紛争をテーマとしたコンフェレンスを開くにはイランが最も公正な場所である。つまり、欧米でやればグルジア支持者が、ロシアでやれば当然ロシア支持者が多くなる。イランで開催するから、双方の主張を分け隔てなく聞くことができるのである（ちなみに、3月5-6日には札幌で同じことをやるが、紛争当事国から9名も招くゆとりは私たちにはない）。ただし、南オセチアとアブハジアの代表が招かれなかったことは奇異かつ不当であり、これについてはルキン氏と私が苦言を呈した。アゼルバイジャン人は、招かれたがなぜか拒否したらしい。ただし、在テヘラン大使館の職員は会場で聞いており、私は2005年にアゼルバイジャン政府の許可を得ずにカラバフを訪問したことをきっちりと咎められた。

討論の基調は、ロシア・アルメニア連合軍とグルジアが激突するものだったが、ロシアからの参加者は、自国が南オセチアとアブハジアを承認してしまった以上は、すでに問題は解決済みとみなす勝ち誇った姿勢が目立った。民間シンクタンクの防衛情報センターを代表するイワン・サフランチュク氏（この人は最近ネット上で大活躍の若手オピニオンリーダーだが、英語がうまいのにびっくりした）は、「サーカシヴィリが始めた軍事行動は、両テリトリーを放棄してでもNATOに急いで加盟しなければならないというグルジア世論を作ることを狙いとしていた」と解釈したが、ちょっとこれは穿ち過ぎの感じがする。会場にいたイラン人の大学院生は、同時通訳が拙くてロシア人が言っていることの中身が分からないせいもあるが、ロシア人の尊大な態度に反感を覚えたようである。

コンフェレンスの前日には、ハニさんが教えている大学院で院生との懇談会があったが、とにかく質問がまじめである。旧共産圏での似たような催しでは、学生は日本の若者風俗や男女交際のあり方についても聞いてくるが、そのような質問は出ない。なお、進路の男女分けは徹底しており、政治学は男子の学問とされているようで、女子が志望する法律、ジャーナリズム、アラビア語などは別のキャンパスで教えているそうである。実際、政治学系があるキャンパスでは女性を全く見なかった。

コンフェレンスでも院生は好奇心が旺盛で、気後れなしに外国人の教授に声をかけてくる（このへんはうちの院生にも見習ってほしい）。私が「イランではアゼルバイジャン系住民の社会学調査をすることができますか」と質問すると、「公式には無理ですが、私的にはできます」などと答える。すると先輩格の院生がずっと近づいてきて、その若者に何か耳打ちし、話題が切り替わるという経験をした。中国より自由度が随分低い印象を受けた。支配的な言説はどこの国でも人工的に作り出されるものだが、イランでは同じフレーズをいろいろな人から何度も聞く（たとえば「アメリカのアフガニスタン侵攻後、アフガニスタンでの麻薬の生産は倍増した」だとか）ので、ごく少数の人が支配的言説のシナリオを書いているという感じがする。このへんは、かつての社会主義国に似ている。

コンフェレンスの組織はおおざっぱで不便なことが多かった。なにしろ数十人の報告者がいるコンフェレンスで2人しか組織専従者がいない。東アジアでも欧米でも旧共産圏でも、その国の女性解放度には関係なく、コンフェレンスの実質上の組織者は女性であることが普

通だが (SRC の青島さんや、デイヴィス・センターのリズ・タルローさん)、女性の地位が高すぎるイランでは、接待的な要素も含む組織の仕事を女性に任せることには宗教上の抵抗感が強いようである。研究への女性の進出は相当進んでおり、たとえば、この研究所のアジア太平洋部門長は女性なのだが。そもそも朴念仁であるイラン人・アゼルバイジャン人の男が組織するので気が利かないことこの上ない。また外務省の職員のくせに、英語が全く駄目である。帰りの便の時間を5回くらい聞いてきて、5回聞いたうえで間違った時間にタクシーを組織する。ホテルのロビーでノンアルコール・ビールを飲みながら途方に暮れていると、もう一人の職員の方が見かねて自分の車で空港まで送って行ってくれた。問題の起こり方も、解決の仕方もイラン的なのだろうが、どこかソ連を思い出させる。



万事がこの調子だから、事前のペーパー配布などももちろんない。欧米、中国、旧共産圏を問わず、『ルバイヤート』をモチーフにした絨毯 (私が買ったのは、もっとずっと安いやつ) 通訳がいる国際学会では、普通、着くまでには通訳はペーパーをすでに読んでいて、着くや否やつかまえられて専門用語などについて質問攻めにあうが、そんなことは全くない。こちらから通訳に歩み寄り、「このパワーポイントに沿って話しますから、明日までに目を通しておいてください」と頼んでも、「ぶっつけ本番で大丈夫ですよ」などと言って、とりあってくれない。もちろんこんな「自信」は、能力が低いことの反映である。自分の報告の後、院生たちから「面白い報告らしいという事だけはわかりましたが、通訳が悪くて何も理解できませんでした」と言われて悲しい思いをする。イランという国は、世に流布する偏見をもって訪れると案外いい国なのに驚くようだが、私のように「アラブ人よりも勤勉・有能なイラン人」といった逆の先入観をもって訪れると失望させられる。有り余るほど資源があり、国民の教育水準も高いのに、組織が下手で何事もうまくいかないというのは、ソ連を思い出させる。アメリカに対して筋の通った批判を展開しているイランがこんな調子では、「自分は怠け者のくせに人のせいばかりするムスリム」という世に流布するイスラーム観をますます強めてしまうだろう。

アフマディネジャド大統領の過激な発言は物議を醸しているが、ハニ氏によれば、トルコのような国も含めムスリム諸国を訪問すると「よくぞ言ってくれた」とアフマディネジャドを褒め称える声が多いそうである。ムスリムであれば誰しも思っているのは、アメリカやイスラエルが怖くて口に出せないことをずけずけ代弁してくれるからである。しかし、イラン人には複雑な思いもある。交通渋滞からいっても、大気汚染からいっても、テヘランは絶望的に地下鉄を必要としている。しかし、ハマスやヒズボラに送る金はあるのに、地下鉄延長に使う金はない。こんなことでは、敬虔なムスリムでさえ首をかしげてしまう。コンフェレンスの最中はマスコミの取材攻勢を受けたが、皆、コーカサス情勢よりもアメリカ大統領選の行方が気になるようであった。経済封鎖を止めさせるために、オバマに勝ってほしいのである。しかし、アメリカ政府がイランとの国交を正常化しようとしたとしても、イランがこんにちのイスラエル政策を続ける限り、アメリカのユダヤ人ロビーがそれを許すまい。

噂には聞いていたが、イラン人は本当にアラブ人の悪口ばかり言う。ペルセポリスの人物

像の顔が削りとられているのを指して、ガイドは「これアラブ人がやったんですよ。こんな連中だから、パーミヤンみたいなことをするんですよ」と平気で言うそうである。私も「イランでは詩人の像を広場の真ん中に置くことができる。アラブ諸国では自転車やサモワールを置く」と聞かされた。絨毯工房で『ルバイヤート』をモチーフとした妖艶な絨毯を買ったが、邦訳文庫本の解説をネタに「イランではオマル・ハイヤムはあまりに反イスラーム、不道徳なので支持されていないそうですね」と聞くと、「イラン人は常にオマル・ハイヤムを敬愛してきたし、ホメイニ革命後もそれは変わっていない。日本でそんなことが言われているとは心外だ」と言われた。敬虔なムスリムであり、同時に造形芸術をはじめとする全人類的な文化を受け入れる教養をもっていることが自慢で仕方ないのであろう。

イラン女性と話す機会はないままに滞在を終えるかと思っていたら、コンフェレンスの打ち上げのデイナーで、フランスを専門にしているたいへん美しい研究者の向かいに座ることができ、含蓄のある話を沢山聞かされた。テヘラン外語大からチュニジアに留学してフランス語を学び、外務省で仏語圏を担当したのち研究所に移ってきたのである。若い独身女性にしか見えないが、「私たちイラン・イラク戦争の世代は、男の子が徴兵忌避のために海外に大量に逃げ出したので結婚できなかった」と言っていたので、それなりの妙齢ではある。「フランスと旧フランス植民地のどちらを研究なさっているのですか」と私が聞くと、「フランスです」と即座に答えた。「植民地はもう沢山。アラブ人だし植民地人だから二重に発展が阻害されているんですよ。同じことをアラビア語やフランス語で何度も言い直さないと通じないんだからうんざりします。フランスも移民が多くて汚くて厭だわ。移民って、要するにアラブ人なのよ。スイスの方がいいわ。人種的にも純粹にスイス人だし。韓国人の友達がスイス人のお嫁に行ったので、あなたどうやってそのオポチュニティーを掴んだのーと質問したんですよ」。これは別に意識が低くて、こんなことを言っているのではない。インテリとしてもムスリムとしてもNGを連発していると確信犯罪しながら、クルーゾー警部のような（フランス語訛りの）英語で、喋るそばから自分で大笑いしながら喋っているのである。

ドバイ



ドバイの建築労働者、明らかに南アジア系

時間は前後するが、テヘランに行く途中で寄ったドバイについても一言。ドバイに早朝についたのち、ほとんど半日乗り換えの時間があったので、まちに出ることにした。空港周辺がビジネスパークになっているが、そこから中心付近まで歩き、その後ボートに乗って、ドバイ・クリークの河口近くにあるわずかな歴史的町並みに向かう。ここにはドバイの歴史博物館もある。台湾での失敗に懲りず、秋の北海道の普通の格好で

来てしまったので2時過ぎになると暑さで気分が悪くなり、タクシーで空港まで戻ってしまった（高地にあるテヘランは、北海道と似た気候であったが）。徹底した自動車社会を前提とした、

アメリカみたいな都市の作りなので、そもそも散策には向かない。バスに乗ると、後方の男性席と前方の女性席が自然に分かれるマナーになっている（表示があるわけではない）のが面白かった。

ドバイはたいへんな建設ラッシュで、超現代的な金融街があるかと思えば、そのすぐ隣には巨大バザールがある。また様々なランクのインド料理店が多い。建設労働者や売り子、概して現業的な仕事はほとんど南アジア系の人々がこなしており、いったいアラブ人はどこに隠れているのだろうと思うくらいである。一見アラブ風のお土産も、Made in India である。イスラームは産児制限に成功しないとされるが、アラブ人の人口が足りずに大量の南アジアからの移民で社会を動かしているのはなぜだろうか。

◆ AAASS 年次大会（フィラデルフィア）に参加して ◆

青島陽子（センター）

朝一番の便で札幌を出発してから、ワシントンDCを経由した長旅の後、アメリカ合衆国発祥の地フィラデルフィアに到着した。会場となるホテルは街の中央部に位置し、道を隔てて高層ビルの隙間からシティ・ホールの絢爛な建物が垣間見えた。

学会のちょうど一年ほど前、スラブ研究センター冬期国際シンポジウム最終日の12月7日が、AAASSの個人応募の締め切りであった。AAASS（米国スラブ研究促進学会）は、以前から名前だけはよく聞いていたものの、断片的な情報の寄せ集めのみで、まるで実態の想像はできていなかった。その年のAAASSには同僚の赤尾光春氏や大串敦氏などが報告に赴いていたこともあり、機会があれば行ってみたいとぼんやりと思っていた程度であった。その12月7日の夜、冬期シンポジウムのために来日していたアメリカのジェームス・メイヤー氏とフランスのグザヴィエール・トリヴェレック氏、それに若手の同僚数人で居酒屋に行くことになった。その時、親密な空気では話をするなかで、世界の「若手研究者」の状況はよく似ているのだと認識し、ハードルが高く感じていた全米学会もなんとなく参加できそうな身近さを感じた。運良く日本学術振興会から科学研究費補助金（若手研究（スタートアップ））を得ていたこともあり、旅費と英文校閲費のあてもあった。そこでこの時を逃したら思い切ることないかもしれないと思い、居酒屋から戻った足でオフィスに帰り、プロポーザルを朝までかかって書きあげ送ってしまった。時差も合わせて、ぎりぎりの提出である。

AAASSの個人応募の制度は比較的最近つくられた制度である。通常は報告者3名に討論者と司会者を合わせた5人の「パネル」を構成して応募しなければならないのだが、人脈のない国内の院生や外国人に向けて、個人でも参加できるよう配慮されたのがこの制度である。プロポーザルが通りさえすれば、実行委員会が、テーマの近い個人参加の人を合わせてパネルを構成してくれるというわけだ。思い切って応募したのはいいが、落ちてしまったのは元も子もないと思い、テーマは2008年AAASS年次大会のテーマであった「ジェンダー」にあわせ（実際はそうでないテーマもたくさん出ていたので、とくに年のテーマにこだわる必要はないようだった）、英語は友人に頼み込んで緊急に直してもらい、それなりにきちんとしたプロポーザルを仕上げた。提出は、ホームページから入って自分の履歴などを書き入れながら進まなければならない、システムがうまく動かないこともあったため、かなり難儀な作業であった。ただAAASSには専門で勤務するスタッフがいるため、問い合わせると瞬時にとても親切な返事が戻ってくる。結局のところホームページからの申請を断念し、プロポーザルと履歴をスタッフにメールで送り、彼女に代わりに申請してもらうことになった。

数週間後の12月22日、AAASSのプログラム委員会から採択の連絡が送られてきた。さら



に数か月後の3月27日、パネルのタイトルが「帝政末期の検閲、教育、そして進歩」というタイトルであること、そして討論者を引き受けてくれる人が見つかったことが知らされた。さらにその一か月後の4月22日、司会者も決まり、パネル全体の最終的な情報が送られてきた。プロポーザルを出した時の私の報告タイトルは「大改革期における女子教育の誕生」といった穏当のものであったが、委員会からのパネル案では、私がつけたタイト

ルは副題にまわされ、主題には「効率的な女性の活用」といった人目を引くタイトルが付けられていた。いったい誰が付けたものであるのかは不明だが、自分が送った報告の要旨に照らし合わせて、うまくキャッチーなタイトルをつけてもらえたように思えて気に入り、最後までこのタイトルを使用させていただいた。その時にパネルに組み込まれたメンバーは、全員7か月後の11月にフィラデルフィアに現れ、皆が当初のタイトルの報告を行った。このように人脈のない個人からひとつのパネルを実現させたのであるから、実行委員会の組織力と実行力は素晴らしいものがあると非常に感嘆し、また深く感謝もしている。

4月以降、学会の直前になるまで、AAASS関連の連絡はぱたりとなくなった。私自身も忙しさの中で瞬く間に月日が流れていった。学会まで一か月に迫ったところで論文を書き始めたものの、パネルのメンバーからも学会事務局も連絡は一切なく、実際の報告の場面のイメージもまったく湧かないままだった。漸く学会の二週間前になって突然にコメンテーターから連絡が入り、論文を送る時期についての指示があったが、それ以外は他のパネリストとの連絡もなかった。不安になった私がスラブ研究センターの同僚に尋ねると、ペーパーはコメンテーターにのみ送り、同じパネルの別の報告者にすら送らない、会場でもペーパーを配ることはなく、フル・ペーパーを書いても目にするのはコメンテーターだけだ、という。そして報告では、ハンドアウトもパワーポイントも使用せず、ただ「話す」というのだ。想像もつかない形態で、不安は募っていった。そうこうしていると、ラファイエット・カレッジの学部生だという人から突然にメールが届き、授業の一環としてパネルの様子を撮影させてほしい、と言う。当日のイメージはさらに混乱し、雲をつかむような思いで、日本を出発することになった。

学会の会場となったのは、市街の中心にあるマリオット・ホテルの三階から五階までの何十もの会議室である。派手な絨毯の上にバルーンが揺らめき、とてつもない数の人が行きかっている。私は会場の雰囲気を押され、また自分の報告への不安に駆られてもいたので、上空でプログラムを眺めていた。そのために開始時間を間違えてしまい、しかも慌てて会場の一つに飛び込んだため、実際に行こうと思っていたパネルとは違う部屋に入ってしまうという始末であった。少しだけ参加したパネルでも気もそぞろで、内容を理解するどころではなかった。夜には、冬期シンポに来日していたジェームス・メイヤー氏とスラブ研究センターの同僚長縄宣博氏が組んだパネルの仲間と食事をご一緒させてもらった。そのパネルには、調査を終えて博論を準備している院生（この層がもっとも大きな参加者母体の一つになっている）が参加していたが、彼女もずいぶん緊張した様子であった。彼女は中東学会がホームグラウンドなので、スラブ系の学会は初めてであり、オーディエンスの反応が予想できない、

と不安がっていたのである。私は、アメリカ人でもそう思うのかと、勇気づけられましたが、逆にさらに怖くもなった。

翌日の午後の一番が私のパネルであった。午前中は寝不足でぼんやりとしていたが、午後、部屋に入るまでの行程はいまでも鮮明に思い出すことができる。報告会場は20人で満杯という程度の小さな部屋で、マイクも存在しない。しばらく誰もいない部屋で、顔も見ることがないパネリストが来るのを待った。10分ぐらい前になると、パネリストと思しき人々がようやく全員集合した。非常に簡単な挨拶を交わしたあと、報告の順番だけを確認して、あっさりとパネルが開始された。観客席の右手には、メールをくれたと思われる学生が大きなカメラをセットして座っていた。観客は10人程度であろうか。

私は第一の報告者であった。20分で収まるようコンパクトな読み原稿を用意して臨んだが、いざ読み始めてみると、緊張からか、読むという簡単な行為もまともにこなせず、所々でなんども躓いた。こういった聞き取りにくい英語に対して、観衆は冷ややかである。少なくとも私にはそう感じられた。読み終わった瞬間に二人ほど人が部屋を出て行ったのを見て、ひどく気落ちした。次の報告者はベイルートから来た若い教授で、私は地名から中東系の方が来ると思い込んでいたが、生粋のアメリカ人であった。彼の英語はもちろんネイティブで報告自体も非常に面白かったが、報告時間をはるかに超えて話し続けた。そのためなのか、彼の報告中・報告後にはさらに数人が部屋を出て行った。その間、逆に入って来る人も何人かいた。最後の報告者は、ロシアでの調査を終えたばかりの院生で、非常にまとまった報告であったが、それでも観客は入れ替わり続けた。驚いたことに、コメンテーターの先生が論じている間にも、聴衆は移動を続けたのである。私の英語の稚拙さは一因であったかもしれないが、それ以前に、そもそも聴衆は恐ろしいほど忍耐力がなく、移動することが常態であるということパネルが終わる頃ようやく理解した。

コメンテーターは、ハプスブルクの近世・近代史を専門にしている先生であった。彼女は、必ずしも自分と専門が近いわけではなく、さらに全員個人で応募したために相互に関連を見出すのが非常に難しい3本の論文を、丁寧に読みこんできていた。そして、できる限りの議論のオーガナイズをしてくださったのである。私の場合は、論文の内容自体は褒められたのだが、はっきり言って質問にはまともに答えることができなかった。返答は無駄に長くなり、司会者に「こういうことも聞かれているんじゃないかしら？」と助け船を出される始末で、思い出すだけでも居心地の悪い気持ちになる。そのあと、フロアに議論が開かれたが、全体に時間がかかっていたために、質疑応答の時間はほとんどとれず、二つ程度の簡単な質問が出されただけで、私に向けられた質問はなかった。そこでも少々寂しい思いをすることになったが、そのままパネルはあっけなく終わり、パネリストはまた非常に簡単な挨拶をお互いに交わして瞬時に解散となった。(あとから分かったが、パネルは自主的につくられていても、ネットで参加者を募ったり、知り合いのつてを通じて探したりするため、お互い知り合いでないことは珍しくなく、こうしたドライさは普通に見られる。)すべての流れが速く、すぐに次のパネルが始まる。そんななか、ビデオ撮影をしていた学生が私に話しかけて、報告に関して二三の質問をしてくれた。私はなんとなくほっとしたような気分になり、一生懸命に答えた。なにもかもが一瞬で過ぎ去ったように感じた。

自分のパネルが終わるとその日はすっかり疲れ果ててしまったが、翌日以降、ようやく状況が見えるようになってきた。よく知っている研究者がプログラムで次々と目に入り、心を躍らせながら聞きに行く余裕ができた。論文や本を読んでいるだけの研究者が目の前で報告をしていることが非常に嬉しく、ルイーズ・マクレイノルズやスーザン・スミス＝ピーターなどには、報告後に名刺を渡して簡単な挨拶をしに行ったりもした。最初に日本に訪れた時からの知り合いであるミハイル・ドルビーロフに再会し、彼の力の入った報告を二度も聞け

たのも幸いであった。シベリアの博物館について印象的な報告をした若手の研究者にも声をかけに行った。プログラムは次々と進んでしまうので、じっくりと話す時間などない。しかし一言でも、面白かったですよ、と言ってみたくなるものだ。シンポジウムやワークショップでスラブ研究センターを訪れた外国人とも会話を交わし食事に出かけることもできた。同じパネルの報告者だった院生にもホテル内でばったりと会い、自分がいかにうまく報告できなかったかをこぼすと、彼女は自分が前年にロシアで報告した時のことを話し、「思い出したくもないひどい有様」だったと笑って慰めてくれた。3日目にして、ようやく AAASS の空気が分かってきたように思えた。

AAASS からは、徹底した市場原理が感じられた。同じ時間帯に 200 人以上による 40 以上のパネルが活動している。聴衆はこれらのなかからいくつかを選んで、パネルを渡り歩いているのだ。なかにははじめから聴衆が非常に少数のパネルもあるし、極端な場合ではまったく聴衆のいないパネルすらある。こういう極めて流動的な場で、聴衆を集めてインパクトを与え、印象に残るパネルにするにはどうしたらよいか。人目を引くパネル・タイトルをつけ、有名な先生をコメンテーターで呼び、有能な同僚を報告者に巻き込む。そして 40 パネルのなかから選ばれ、一度入った聴衆が他に移らないようにし、質疑応答まで興味を持たせて聞かせる。AAASS はそういったような一種のゲームのようにも見えた。このゲームの推移は、時間帯や裏番組などの状況にもかなり左右されるため、必ずしもパネルの学術的レベルを反映しているというわけでもなく、当たりの年もあれば外れの年もあるといった感じだ。私が聴講したあるパネルでは、聴衆が私ともう一人しかおらず、今年は外れだという様子でパネリストの士気がまったく減退していた。そして、パネル自体も 1 時間足らずで終わってしまったのである。

聴衆を集めるという意味では、自分でパネルをオーガナイズすることの利点は大きいにある。まとまりのある報告を並べて流れのあるパネルを作ることができるし、そうすることで聞き終わった時に一定の知見が得られるような締めりのある 2 時間を提供できる。AAASS のゲームに参戦するとは、パネルを自分で組織するようになった時に本当に言えることかもしれない。ただ、常に同じようなメンバーとパネルを組んで、同じような聴衆が聴きに行くことになっているという批判がよく聞かれるのも事実である。こうしたマンネリという欠点を考えると、個人応募にも大いに利点がある。今までは知らなかった近い分野の研究者と知り合う契機を得られるからだ。私のパネルに参加したベイルートの研究者に個人応募で参加した理由を尋ねると、色々な人からの研究のフィードバックが欲しいが、同じ研究テーマの人が非常に少ないので個人応募するようにしている、とのことであった。

AAASS は、膨大な人数の参加者が巨大な会場の中を常に動き回っているような場なので、参加すること自体のハードルは実はそれほど高くはない。失敗を注視して見守り非難するような根気のある聴衆はいないので、最悪でも何かマイナスになることはないのである。しかし、プラスの効果を得ようとする、つまり、一定の存在感を見せようとする、これほど難しい場はない。英語力は思ったよりも高度なものが必要とされる。彼らが非英語圏の学者を排除しているというわけではなく、単純に分かりにくい報告は我慢強く聞いてもらえないからである。もちろん、報告の英語などは経験次第で向上するものであるから、最初の数回はひどい恥をかき覚悟がいるということであろう。高度な研究内容もちろん必要であるが、この点に関して、日本の研究者が引けをとることはほぼないと思われる。むしろ、その見せ方であろう。あまり浮足立ってもいけないが、謙虚さはとくに美德ではない。とりわけ、外国から参戦しているような場合、参加自体がイレギュラーなので、存在意義を必要以上に見せなければいけないように思えた。初めて参加した私は、これらのどれも出来ていなかったと思う。正直に言って、ただ途方に暮れていた。おろおろしていた私から見て印象的だったのは、

会場ではしばしば見られた若手ロシア人研究者の迫力である。私がよく見かけたロシア人はどのパネルでも常に質問をしていた。色々なパネルで質問を出すことは、聴衆でありながら自分の存在を示す一つの武器でもあるからだ。その他にも、英語がそれほど流暢ではなくとも、報告で熱を込めて滔々と話し続けるロシア人も何度か見かけ、彼らにもある種の凄味を感じたのである。発信しなければゼロであり、マイナスがないことは最低限の仕事をしたというより、存在価値がないという意味になる、そんな場である。伝える、分からせる、という迫力が何よりも必要なものであるかもしれない、と思えた。

最後に、学会の内容的なものに少しだけ触れておこう。私は専門が歴史なので、会場では歴史のパネルを渡り歩いていた。聴衆へのアピールを最大の眼目とするため、パネルには流行が反映しやすい。そう見ると、歴史では圧倒的に文化史が多かった。もはや社会史ですらめったに見かけず、文化史に大きく振れているのである。また大会のテーマがジェンダーであっただけに、当然のことながら、今回はジェンダー論のパネルが非常に多かった。そして、民族・宗教・地域史が劇的に流行している。全般的に言って、オーソドックスな歴史の展開についての議論や時代論などではなく、個別の面白さが強調されていたように見えた。あるパネルで、中央・地方関係という観点から地域史を研究している人たちに対して、コメンテーターが中央・地方関係はもう結論が見えているから論じる必要はない、もっとその地域に焦点をあて、地域文化史に特化した方が良い、と述べていた。これには率直に言って非常に驚いた。

私の初めての AAASS への参加は、それほど成功であったとは思えないが、学ぶところの大きいものであった。参加には資金がかなり必要になるので、恒常的に参加することはなかなか難しいが、いつかリベンジの機会が欲しいと思う。次は、それなりの心構えと、ある種の戦略を用意するぐらいの余裕をもって臨めるように思うのだ。

◆ 学会カレンダー ◆

- 2009年3月4日 新学術領域研究全体集会（記事参照）
- 3月5-6日 スラブ研究センター冬期国際シンポジウム（記事参照）
- 6月6-7日 比較経済体制学会全国大会 於国学院大学
- 7月9-10日 新学術領域研究国際シンポジウム・スラブ研究センター夏期国際シンポジウム
- 10月24-25日 日本ロシア文学会定例総会 於筑波大学
- 11月12-15日 米国スラブ研究促進学会（AAASS）年次大会 於ボストン
- 2010年7月26-31日 ICCEES（国際中欧・東欧研究協議会）第8回世界会議 於ストックホルム（パネル公募締切りは2009年2月28日）

センターのホームページ（裏表紙参照）にはこの他にも多くの海外情報が掲載されています。
[大須賀]

図書室だより

◆ 逐次刊行物購読誌・紙の見直し ◆

センター図書室では、これまで、購読する逐次刊行物タイトルの維持に努めてきましたが、財政的に困難となったため、見直しをおこない、2009年度より約100タイトルを削減することとなりました。

また、ロシア・旧ソ連諸国の新聞については、保存用にマイクロフィルムを購入してきましたが、これも継続困難となり、2007年分で終了となりましたのでお知らせします。

利用者のみなさまにはご不便をかけますが、ご理解願います次第です。[兔内]

◆ 耐震改修工事完成による移転について ◆

昨年夏より始まったスラブ研究センターの耐震改修工事は、本年2月中に竣工の予定でしたが、若干の遅れが生じている様子です。その後、図書室は、改修された建物の1階に移動します。そのため、3～5月ごろ、一時休室することが予想されますので、あらかじめご承知おき願います。[兔内]

ウェブサイト情報

2008年11～12月までの2ヵ月間における、センターのホームページへのアクセス数(但し、gif、jpg、png等の画像形式ファイルを除く)の統計です。[山下]

	全アクセス数 (1日平均)	うち、邦語表紙 アクセス数 (1日平均)	うち、英語表紙 アクセス数 (1日平均)	国内からの アクセス数 (%)	国外からの アクセス数 (%)	不明 (%)
11月	382,073 (12,736)	11,118 (371)	2,080 (69)	108,826 (28.5%)	210,860 (55.2%)	62,387 (16.3%)
12月	384,348 (12,398)	11,858 (383)	2,220 (72)	106,345 (28%)	206,701 (54%)	71,302 (19%)

編集室だより

◆ スラブ・ユーラシア叢書第4巻 ◆

『近代東北アジアの誕生：跨境史への試み』刊行



スラブ・ユーラシア叢書第4巻『近代東北アジアの誕生：跨境史への試み』(左近幸村編著)が12月に刊行されました。2007年3月にスラブ研究センターで開催された研究会「近代東北アジアにおける国際秩序と地域的特性の形成」での報告がもとになっています。

執筆陣は、ロシア極東史の泰斗、原暉之氏を除き、いずれも60・70年代生まれの中堅若手から構成されています。最年少は編著者で79年生まれ、まだ博士後期課程です。目次からも明らかですが、現在、各分野の第一線で活躍している気鋭の研究者が多く含まれています。また相互参照を徹底し、すべての論文が、本書所収の他のいずれかの論文に言及しています。このことは当然、論文集一般のあり方についての問題提起でもあります。

ロシア史を軸としつつも、領域的には大きくそこから飛び出した本書は、2008年の初頭に講談社から刊行された『講座スラブ・ユーラシア学』(編集代表家田修)の事実上の続編となっ

ています。本書を手にとり、「ここに結集した野心的な歴史家たちの熱意」（川北稔氏による帯の推薦文より）を直に感じていただければ幸いです。[左近]

序論 左近幸村 東北アジアから見える世界

第一部 ロシアとアジアのネットワーク

第一章 原暉之 近代東北アジア交易ネットワークの成立：環日本海圏を中心に

第二章 麓慎一 国際的環境から見た日露間の航路形成

第三章 天野尚樹 サハリン石炭と東北アジア海域史

第四章 左近幸村 キャプタからウラジオストクへ：国境地帯における貿易構造の変化と関税政策

第二部 変容する中国の内と外

第五章 岡本隆司 19世紀中国における自由貿易と保護関税：「裁釐加税」の形成過程

第六章 矢後和彦 露亜銀行（1910～26年）覚書

第七章 浅田進史 利益独占と「門戸開放」：ドイツ山東鉄道事業をめぐる秩序形成

第八章 荒武達朗 1900～1920年山東半島の移民と農村経済

第三部 東北アジアからの露清帝国再考

第九章 杉山清彦 大清帝国のマンチュリア統治と帝国統合の構造

第十章 塚瀬進 中国東北統治の変容：1860～1880年代の吉林を中心に

第十一章 松里公孝 プリ-amール総督府の導入とロシア極東の誕生

第十二章 オイドフ・バトバヤル ロシア帝国の辺境統治と領域拡張：東部辺境の国境監督官制度

補論 桃木至朗 海域史、地域研究と近代東北アジア

◆ 新しい研究報告集の発刊 ◆

12月付けで『スラブ・ユーラシア研究報告集』第1号が発行されました。これは1979年から2004年まで95号・別冊5号にわたって出版された『スラブ研究センター研究報告シリーズ』の趣旨を受け継ぎ、スラブ研究センターを舞台とした恒常的な研究活動のプロセスおよび成果を反映するワーキング・ペーパーとして、このたび新たなシリーズとして刊行されるものです。今号の内容は科学研究費研究「スラブ・ユーラシアにおける東西文化の対話と対抗のパラダイム」の研究成果の一部で、タイトルは『共産圏の日常世界』。内容は以下の通りです。

柚木かおり ポストスターリン期における組織的な日常娯楽の盛衰：楽器バラライカの事例から

塚崎今日子 ソ連時代のアネクドート：「アルメニア・ラジオ」シリーズ

越野剛 ソ連の学校における少女の物語文化

Alexei Palkin Games of Russian Pre-school Children in Soviet and Post-Soviet Periods: Comparison

鈴木正美 1960年代のジャズ・フェスティバルと聴衆

岩本和久 禁忌とアトラクション：キラ・ムラートヴァの映画に見る日常的空間とその異化

宮風耕治 1980年代ロシアSFファンダムの構造と変動

鳳英里子 壁面を彩る：タシケントのパネル式多層階集合住宅の装飾事例

伊賀上菜穂 「旧」古儀式派農村はソ連時代にどう語られたか：プリヤート共和国・セメイスキーに関する1960～70年代の記述の特徴

中野徹 英雄の読まれ方：小説『鉄道遊撃隊』の受容



- 応雄 映画『千万不要忘記』（くれぐれも忘れぬよう、1964）と「道徳的マゾヒズム」：切斷・連接としてのイデオロギー
- 中根研一 中国の怪獣（野人）と（水怪）：現代中国を徘徊する妖怪イメージ

◆ スラヴ研究 ◆

『スラヴ研究』第56号は、審査の結果、以下の原稿を掲載することになりました。2009年春の刊行予定で作業を進めています（掲載順は未定）。

<論文>

- 北見論 「ロースキーの直観主義とベルクソン哲学」
- 櫻間瑛 「『受洗タートル』から『クリャシェン』へ：現代ロシアにおける民族復興の一樣態」
- 地田徹朗 「戦後スターリン期トルクメニスタンにおける運河建設計画とアラル海問題」
- 中馬瑞貴 「ロシアの中央・地方関係をめぐる政治過程：権限分割条約の包括的な分析を例に」
- 見附陽介 「M.M. パフチンの対話理論における人格とモノの概念：C.JI. フランクとの比較の観点から」

<研究ノート>

- 朝妻恵里子 「ロマン・ヤコブソンのコミュニケーション論：言語の転位と主体の転換」
- 後藤正憲 「実践としての知の再／構成：チュヴァシの伝統宗教とト占」
- 封安全 「ロシアの木材輸出の新展開：対中国貿易を中心に」

<書評特集>

久保慶一・西山克典・鳥山祐介・家田修・宇山智彦・松里公孝 『講座 スラブ・ユーラシア学』批評と応答

今回も多方面にわたる力作が揃いました。有益な講評・アドヴァイスを書いてくださったレフェリーの皆様にお礼申し上げます。

次の第57号の原稿締め切りは、2009年8月末の予定です。センターのウェブサイトでご投稿規程・執筆要領をよく読んでご投稿ください。[宇山・長縄]

会 議 (2008年11～12月)

◆ センター運営委員会 ◆

2008年第2回 12月6日

- 議題
1. 全国共同利用施設から共同研究・共同利用拠点への移行について
 2. 運営委員会の在り方について
 3. 2009～10年度共同研究員の委嘱について
 4. 共同研究公募の審査
 5. その他

◆ センター協議員会 ◆

2008年度第6回 11月10日

- 議題
1. 北海道大学スラブ研究センター運営委員会について
 2. その他

みせらねあ

◆ 人物往来 ◆

ニュース 115 号以降のセンター訪問者（客員、道央圏を除く）は以下の通りです（敬称略）。
[岩下／大須賀]

- 11 月 6 日 日本村眞澄（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）
- 11 月 10 日 パク（Park, Hye Kyung）（ハルリム大学、韓国）、キム（Kim, Taehwan）（コリア基金、韓国）、シン（Shin, Beon-Shik）（韓国スラブ学会）
- 12 月 4 日 ポポフ（Andrei Popov）（モルドヴァ外交協会）、六鹿茂夫（静岡県立大）
- 12 月 5 日 ポトゥーチェク（Martin Potucek）（カレル大、チェコ）、ラトランド（Peter Rutland）（ウェスリアン大、米国）、サクワ（Richard Sakwa）（ケント大、英国）、伊東孝之（早稲田大）、池本修一（日本大）、上垣彰（西南学院大）、小森田秋夫（東京大）、仙石学（西南学院大学）、平田武（東北大）、溝口修平（東京大・院）
- 12 月 6 日 小松久男（東京大）、月村太郎（同志社大）、沼野充義（東京大）、西山克典（静岡県立大）、三谷恵子（京都市大）
- 12 月 8 日 ラブキン（Yakov Rabkin）（モントリオール大、カナダ）、巽由樹子（東京大・院）
- 12 月 20 日 井上貴子（大東文化大）、上垣彰（西南学院大）、杉本良男（国立民族学博物館）、唐亮（法政大）、中村唯史（山形大）、村田雄二郎（東京大）、三谷恵子（京都市大）、山根聡（大阪大）
- 12 月 22 日 クズネツォフ（Boris Kuznetsov）（ロシア国立経済大）
- 1 月 15 日 胡振華（中央民族大、中国）

◆ 研究員消息 ◆

岩下明裕研究員は 10 月 11 ～ 22 日の間、科学研究費研究に関する国際会議出席及び資料収集のため、インドに出張。また、12 月 1 日～12 月 5 日の間、国際会議での研究成果の発表及び研究打ち合わせのため、米国に出張。また、12 月 11 ～ 14 日の間、国際会議での研究成果発表のため、中国に出張。

松里公孝研究員は 10 月 25 ～ 31 日の間、科学研究費研究に関する国際カンファレンス出席のため、イランに出張。また、11 月 19 ～ 25 日の間、重点配分経費研究集会開催にかかる予備会議のため、米国に出張。また、1 月 17 ～ 27 日の間、新学術領域研究に関する現地調査のため、ロシア、グルジアに出張。

望月哲男研究員は 11 月 4 ～ 11 日の間、科学研究費研究に関するシンポジウム出席のため、ロシアに出張。

家田修研究員は 11 月 7 ～ 27 日の間、科学研究費研究に関するハンガリーの環境資源の公共財的研究に関する現地調査のため、ハンガリーに出張。

野町素己研究員は 11 月 18 ～ 30 日の間、海外調査及び地域研究コンソーシアム打合せのため、ポーランドに出張。また、3 月 22 ～ 4 月 1 日の間、学会出席のため、ロシア、英国に出張。

田畑伸一郎研究員は 11 月 19 ～ 25 日の間、科学研究費研究に関する学会における研究成果の発表のため、米国に出張。

長縄宣博研究員は 11 月 19 ～ 27 日の間、科学研究費研究に関する学会における研究成果の発表のため、米国に出張。

荒井信雄研究員は、12 月 16 ～ 24 日の間、科学研究費研究に関する資料収集のため、ロシアに出張。

ウルフ ディビッド研究員は、12 月 28 ～ 1 月 12 日の間、新学術領域研究に関する資料収集、会議出席及び報告のため、中国に出張。また、1 月 12 日～8 月 22 日の間、米国に出張。

宇山智彦研究員は、1 月 11 ～ 21 日の間、財団法人日本国際フォーラム「安全保障に関する知的交流事業」に関わる現地調査・意見交換のため、アゼルバイジャン、グルジア、アルメニア、ロシアに出張。

もう、伝統となったセンター年末パーティ (2008.12.19.)



改築中のため、クラーク会館の食堂だった場所でおこなわれました。予算が乏しいということでみなさんが腕によりをかけ、厨房の設備を利用して、チェコの家料理、秋田のぎりたんぼ鍋、特製たこ焼きなど様々な手料理が並び、かえって豪華なテーブルとなりました。

右は3人娘によるグルジアのクリスマス・ソング。出し物は他にも、素人技とは思えないヴァイオリンやチェコの演奏、元気な新人による日本ハムファイターズの応援歌、そして修論に苦しむ学生による、共感と笑いをさそった替え歌など、今年も非常に多彩なものでした。



エッセイ

S. グラディ	19世紀の中国における世界地理への関心と林則徐著『俄羅斯国記要』	p. 9
半谷史郎	極私的・ハーバード大学図書館案内	p. 12
松里公孝	台北とテヘランの学会に参加して	p. 15
青島陽子	AAASS 年次大会（フィラデルフィア）に参加して	p. 21

2009年1月30日発行

編集責任 大須賀みか
編集協力 田畑伸一郎
発行者 岩下明裕
発行所 北海道大学スラブ研究センター
060-0809 札幌市北区北9条西7丁目
Tel.011-706-3156、706-2388
Fax.011-706-4952
インターネットホームページ：
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/>